

旧久留米藩士族と国営安積開墾事業

旧久留米藩士族の入植について、みてみよう。

久留米藩難事件

江戸時代に久留米藩を治めていたのは有馬氏^{ありま}であった。明治2年(1869)に版籍を奉還し、藩知事となった。久留米藩は、遷都反対や新政府への非協力的態度により、反政府的であると疑念を持たれていた。

明治3年(1870)に山口藩(長州藩)で脱隊騒動が起こり、これを扇動したとされた大楽源太郎らは逃走し、久留米藩に潜入した。政府の厳しい追及の末、藩知事へ罪が及ぶのを危惧し、久留米藩士が大楽らを謀殺するに至る。反政府の動きと大楽ら隠匿の罪により、多数の処分者がでた。これが久留米藩難事件である。



久留米城址

『福岡県勝景写真帖(2)』 宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵
明治30年(1897)に設置された福岡県立久留米高等女学校が掲載されていることから、明治30年頃の久留米城跡を撮影したものと思われる。

旧久留米藩士族の入植

久留米藩難事件に連座し、熊本監獄に収容されていた久留米藩士族の森尾茂助^{もりお もすけ}らは、西南戦争により熊本城が包囲されたため、仮釈放となった。その後赦免された森尾は陸軍御用係となる。士族の処遇について憂慮していた森尾に、内務卿大久保利通が開墾事業への参加を勧めた。

森尾は、福島県の担当者である中條政恒^{なかじょうまさつね}と開墾事業の具体的な協議をした。中條は速やかな移住を進めると共に、困難な事業であることから安易な気持ちで入植することがないように念押しをしている。森尾は久留米に帰ると、参加者を募集した。

明治11年(1878)10月25日に先発隊が久留米を出発した。一行は、同日博多に到着し宿泊。翌日福岡県庁に出頭し、県令と面会した。27日に汽船光運丸に乗船し、翌日神戸港へ入港した。下船後大阪へ移動し、見物している。大阪から神戸へ戻り、船で横浜港へ移動した。31日に横浜から汽車で東京へ移動し、数日滞在した後、川蒸気船に乗り、茨城県古河へ到着した。そこからは徒歩で移動し(時折人力車も利用)、同年11月11日に郡山へ到着している。翌12日に開成館へ出頭し、県官らと面会した。

久留米開墾社ハ明治十一年ノ秋、森尾茂助方今ノ形勢ヲ案シ民産ヲ殖スルハ陸羽ニアルコトヲ覺リ、天下移住ノ率先翹楚トナラント勇往同志ヲ募リ、十二年一月中社則ヲ編シ、同三月中許可ヲ得、百戸團結大蔵壇原ヘ移住セリ、社則ノ概子ハ一戸金百円ヲ齎金シ、本県規則ニ依リ家屋建築費并開墾補助費ヲ拝借シ、結社年限中ハ家屋ト耕地ヲ共有シ、解社ノ際所有ヲ定ムルヲ以テ精神トス、於是有馬旧知事ニハ疾病等救助費トシテ金千円ヲ給与セラレ、奨励ノ為ニハ株金二百円ヲ加ヘラレ続テ三条、岩倉ノ両大臣ヨリモ株金四百円ヲ加ヘラル、随テ勸農局ヨリ農夫二名ヲ添ヘ、農馬十二頭、器械一式ヲ貸与セラレ、上下保護ノ厚キ一ニ茲ニ至レリ、豈桑野士族ノ比ナランヤ、其起原ニ於テハ、明治十一年八月中、中条政恒氏公事ヲ以テ東京ニ在リシ時、森尾茂助適々行テ之ヲ談ス後屢々行テ吐露スル所蓋切ナリ、中条氏森尾氏ト固ト一面ノ識ナシト雖モ其言ノ誠実虚ナラサルヲ知ルアリ、心ヲ此事ニ論シ経営拮据極テ至リ十月ニ迫ンテ、該社創業ノ局ヲ了シ大挙移住ノ策行ハル、森尾等ヲシテ其情懷ヲ達シ、徒食ノ譏ヲ免レ、清世ノ良族タルヲ得セシムル、

久留米開墾社の入植

『分草実録』(立岩家文書 郡山市歴史情報博物館所蔵)より抜粋
『安積事業誌』にも「分草実録ニ曰ク」と、旧久留米藩士族の入植について森尾茂助と中條政恒が話し合ったことが記載されている。